

舞鶴、福知山での思い出

高木 惣治
予科10-8
航空12-1
(東松山市)



今から六十年も音の話である。昭和二十年七月二十八日我々航空一次第一梯団総勢約五百名を乗せた帝立丸は朝鮮清津に向け舞鶴港を出航した。舞鶴湾は意外に静かだった。漸く行き先の判明した我々士官候補生は長旅の疲れも忘れ、船室に車装品を置いて、皆上甲板に集まった。予科同区隊の者は修武台入校以来の懐かしさもあってお互いに誘い合い円陣を作って尽きぬ話に花を咲かせ、やがて歌い馴れた軍歌航空百日祭に代った。稍々哀愁を帯びた音律は別れ行く故国に対する惜別のあかしでもあり、初陣の壮途を祝う船出の雄叫びでもあった。

船橋には心地良い涼風が吹き抜けていた。一瞬轟音と共にフランス製九八〇〇屯の船体が一米程飛び上がった。昨夜来B29の落した機雷にやられたのだ。夏の日は長くまだ暮れ切ってはいない。全員下船の用意をして上甲板に集まり、暗闇の迫る頃

漁船に助けられて半島の林間に上陸した。このまま野宿とのことで寝心地のよさそうな場所を見つけて仮眠に入る。漸くうとうとと眠くなった頃なにやら胸のあたりをはい回る。そのままにしておく。次は顔の上を歩き回る。この蟹の襲撃に一晩中悩まされ不眠不休のうちにも夏の夜は明け易く朝が来た。松の枝越しに見る帝立丸は帆柱を半分海面に残して沈んでいた。初めての戦争体験である。

区隊は舞鶴高女の教室に戻った。敵は我々がここにきたのを知っていたのか、B29はもとよりグラマン、ポートシコルフスキー、ロッキード等たて続けに攻撃をしかけて来る。どうせやられるなら何処に居たって同じことと、たかをくくって教室に居ると奴等は爆竹を校庭に一直線に並べて火をつけたように爆音と砂煙りを上げて飛び去って行った。お前らがきたのでアメリカの攻撃が始まった。などと言う町の噂も聞いた。

その後、間もなく長田野の廠舎に移った。八月に入った頃だと思ふ。第二梯団の戦死者五名の荼毘に付された遺骨を迎えに行った。首に抱いた白木の箱の余りの重さに我々から驚いたので今も強烈に覚えている。その後、戦闘、襲撃、偵察の連中は船を見つけて杏樹に向けて出ていった。我々は相変わらず居候の暮らし、正に招かれざる客、福知山連隊の食料を横取りするような羽目で、海水を温めた中にサツマイモの葉を何枚か入れたのが味噌汁代わり、メンコに半分位の高梁が毎日の食事だった。それだけではない。

寝台毛布の中は南京虫の運動場で体中に赤あさが出来、夜もろくろく眠れない。

兎に角腹は空くし、何もすることはない。そこで思いついたのが魚釣りだ。近くに小川がある。そこから魚を採って飯の足しにするのだ。竿は近くの竹藪から頂き、針は番線を曲げて作ったような気がする。支給された木綿の糸を繋ぎ合わせて仕掛けは出来た。次は餌の番だがそこが素人と玄人の違いだ。子供の頃からの経験で餌は川のなかに有ることを知っていた。川底の石の裏側に巣を作っているチョロと黒虫だ。これがあれば魚は必ず釣れる。案の定毎日何匹かの魚を獲って焼いて食った。

そうこうするうち広島に奇妙な爆弾が落とされた事を知った。マッチ箱一個で戦艦が沈むと噂は聞いたことがある。それからB29が一機高い空を飛んでいてもなんとなく不気味だった。

八月十五日は朝から暑さの厳しい日だった。廠舎の林間に啼く油蝉は本気で競演していた。今日は重大な放送があるから全員福知山の予備士官学校の校庭に集まるよう知らされた。愈々本土決戦か、襟をただして玉音放送に聞き入るが雑音がひどく聞き取れない。その内隊列にどよめきが起った。戦争に負けたんだ。

虚脱感が全身を走った。全員直ちに修武台に帰ることとなり八月十六日福知山から汽車に乗った。途中綾部から京都に行かず大阪についた。大阪駅のホームは高い。見渡す限り瓦礫の原、青いものは一つも無かった。東海道をひた走り熱海を通る頃は夜も更けていたが、車窓に映る民家の灯りは全く別世界に来たような解放感と同時に限りない挫折感に悩まされたのは私一人ではなかったろう。東京駅からどう帰ったのかよく覚えていない。

航空士官学校に入れると又暴動の火種になるという事で秩父の大田村の小学校に入れられた。

途中、寄居の駅で私の村の知人に会い、今日家に帰れるかも知れないと伝えた。

話は私の両親にも伝えられ、夕方両親は畠で取れた西瓜を持って迎えに来てくれた。区隊の皆さんには誠に申しわけないが、毛布と雑嚢、略帽と五円を貰って皆に別れを告げた。六十期生中最も早く家に辿りつけたのは私だったかも知れない。